

●太平洋上に光り輝く深い緑の宝石：奄美大島●

ー 鹿児島県国際交流員 スノーデン・ジョセフ（イギリス出身）

鹿児島空港から離陸し、1時間ほど飛行機で南の方向へ行けば、やっと見えてきます。無限の大海原から突出している深い緑の宝石、奄美大島。

甘い風味を持つ黒糖焼酎や世界三大織物の一つと言われる大島紬の本場だけではなく、奄美大島は独特な生態系や生物多様性を持ち、徳之島、沖縄島北部、そして西表島とともに、2021年に世界自然遺産に登録されました。私は2022年12月中旬に奄美大島を訪れる機会を得る事ができ、身をもって奄美大島の魅力を経験することができました。このコラムでは、私が訪問したスポットの印象についてご紹介します。



奄美大島が見えてきました！

（1）奄美パーク

奄美空港からたった5分離れた場所に、必見の奄美パークがあります。奄美群島の観光拠点施設として、「海の道」、「島の道」、「森の道」など様々な展示ゾーンを通りながら奄美について学ぶことができます。画像、模型、そしてインタラクティブな映像などを組み合わせた展示であり、様々な形で奄美の文化や自然環境を紹介してくれます。なお、展示品前のQRコードを読み取ることで、多言語で展示品の説明を受けることができます。

総合展示ホールのすぐ近くにあるイベント広場では子供向けのクリスマスパーティー、ファッションショーなど様々なイベントが開かれます。



総合展示ホール



イベント広場

パーク内にある田中一村記念美術館も見逃せません。田中一村は50代になってから奄美大島に移住し、アカショウビンなど奄美大島を代表する野鳥を独特なスタイルで描きました。田中一村記念美術館は作品数が400点以上あり、季節ごとに出展されている作品が変わります。



田中一村像

個人的に言えば、奄美パークの展望台からの眺めが特に印象に残っています。奄美での冒険を始めるには最適な場所だと思いました。



奄美パークの展望台

(2) 原ハブ屋

奄美大島はハブという毒蛇が有名であり、島内では10万匹が生息していると言われています。この事実を頭の片隅に置きつつ、私は次の目的地に向かいました。

原ハブ屋は1948年に創業したハブの専門店であり、独特なハブの加工品を販売している上に、1日3回ハブのショーを行っています。様々なブランドとコラボをし、高級感あふれる商品が揃っています。

ハブのショーはとても興味深い体験でした。ショーの司会、原武広さんがユーモアを交えながら様々な蛇を目の前で紹介し、ハブ捕りも実演してくれました。ショーは日本語で行われるものの、英語でのショーガイド（説明書）もあります。

私を特に驚かせたのは原さんのある発言でした。

「ハブは森の守り神なんですよ。」

この考え方は原さんにとどまらず、私と話してくれた多くの島民が持っているようでした。無論危ない動物とは知っていても、島の生態系を守る存在として島民はハブを大切にしており、ハブに対して尊敬を表しています。



私は本当に蛇を持ったのか…
それとも錯覚なのか…



ハブのショーの司会、原さん



森の守り神、ハブ

(3) 奄美自然観察の森

海岸から離れ、龍郷町の森へ向かうと別世界に入ります。打ち寄せる波の音に代わり木の葉のざわめきやルリカケスの鳴き声が響き渡り、何千年も前の原生林に足を踏み入れたかのような感じがします。ここは、奄美自然観察の森です。

森の館に入ると、奄美大島の独特な生態系を紹介する展示室があります。1～2月にヒカンザクラ、夏に蛍など、四季折々の魅力について楽しく学べます。



森の館



キツツキ



アコウの木



イモリ

展示室を一周してから本格的な森に入ると、自然の中にある奄美大島の動植物を見ることができました。森に入った瞬間、ガイドさんから「森は五感で楽しむ場所です。」と言われました。

ガイドさんにご案内をいただいたおかげで、野鳥の鳴き声を聞き、「締め殺し木」とも呼ばれるアコウの木の不思議な形を視察し、林床に落ちていたシイの実を食べることもできました。最後に、展望台まで登り、そこに絶景が待っていました。展望台までの道はバリアフリーであるため、誰でも楽しめる場所です。



展望台からの眺め

(4) 奄美大島の居酒屋

空が暗くなり、奄美での初日が終わるところでしたが、ホテルに戻る前に私は居酒屋に立ち寄りしました。

長命草の天ぷらや油そうめんなどの島料理をいただきましたが、鹿児島本土の料理と同じく、とてもおいしかったです。奄美大島を代表する黒糖焼酎も数種類、水割り・ソーダ割りの異なる飲み方で試飲することができ、その飲みやすさに驚きました。



黒糖焼酎の瓶

そして、初日のハイライトとして本格的な島唄を聞くことができました。最初は、ゆっくりと島のメロディーを聞き、ただその雰囲気にはまりましたが、どんどん居酒屋のお客さんが盛り上がり、最後に皆さん（私も含めて）と一緒に「どっこい、どっこい」と歌い、踊りました。その瞬間は、一生忘れないと思います。



食事もお酒も素晴らしい夜でした

(今回はここまで！

コラムの続きは 176号で掲載します。)